



バレリーナ 油彩会員 山崎 亮

## 第97回道展を終えて



事務局長 澤田 範明

第97回道展は11月5日（日）最終日を迎え、無事会期を終えることができました。ご来場の皆様及び、関係の皆様には心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

総入場者数は、過去のように10,000人越えとはいきませんせしたが、昨年を上回る8,000人を超える皆様の観覧を得て、創立100周年に向けた良いステップとなりました。また、充実した壁面であったとの評価をいただきました。第96回展よりさらに展示を工夫することで見やすい会場を作り、作品の良さを生かすことになったと思います。

社会状況の変化と進歩は実にめざましく、特にAI、人工知能の研究は、様々なデータを蓄積操作することにより、創造性を含めた知的な行為を機械的に実行することを目指しています。

また、コロナ禍を乗り越えられたかは議論の余地がありそうですが、一時の危機は辛うじてクリアできたように思います。社会に与えた影響、爪痕は大きいと言わざるを得ません。いまだに離職を余儀なくされた人材は戻ること無く、多くの分野で人手不足が慢性化し、運送業界の2024年問題に代表されるような社会問題、タクシーやバスの運転手不足などや世界的な円安などが慢性的になり、経済や我々の生活に与える影響の大きさは計り知れません。

これらは全て、公募展などの展覧会活動をはじめ、美術における諸活動への影響やもたらす変革は計り知れませんが、機械にはできない人間の素晴らしさや本質に迫るチャンスを得たと考えるべきだと思います。そこで発揮される人間の持つ創造性の本質こそが重要だと考えます。

第97回道展も道内外の公募展と同様、社会状況の全ての変化、影響を背景に存在しています。その上に立って現在の出品者の造形における認識や感性に対する追求の幅や深さ、質に注目いただきたいところです。また、彼らは、あ



取材を受ける北海道美術協会賞 船井勇佑さん

るいは、私たちは何を感じ、何を表現したか、または、表現しようとしているかが、創造性の動機であり、人生観であり、その内容や価値がいかにも人間にしか由来し得ないものになっているかを感じ取っていただきたいところです。判別することが難しいのは、写真やコンピューターに由来する画像や形が使用の仕方によっては、いかに創造性を阻害しているかです。なぜなら、実行している自分は利便性の選択が創造性の一端であると認識しているからです。そういうケースの全ては否定できませんが、多くの場合、実は感性のスイッチが切れていることに制作者は気付いていません。視覚上、網膜に映っているだけでは色彩についての効果を認識していることにはなりません。別の言い方をすれば、キャンバスや画面に作業的に形を写した行為は創造ではなく、形を選択したにすぎないと言えます。眼自体は生物的な機械であって比較や判断はしていないのです。もっと進めて言うと、モチーフをそのまま観察し、写しただけでは真に創造的な表現とは言えないということになります。まさに岡倉天心の創造の精神が思い起こされます。

今こそ、創造性、造形性、芸術性とは何なのかが問われるべき時代が到来したと言えるのではないのでしょうか。ある意味、造形や創造の本質に迫らざるを得ない好機とも言えるかもしれません。ピンチをチャンスに変えることこそ人間の智慧ではないのでしょうか。芸術的叡智が様々な変容の中で本質を失うことなく、進化していくことを願って、イスカンダルの如く道展創立100周年に向けて旅立ちましょう。

97回を迎えた道展。ここ数年の道展の展示空間は、とても見やすくなっていて、評判がよい。90周年の記念道展から展示空間改善の試みがはじまり、2017年の92回に大幅改革がなされたという。事業部会員の千代明が各作品の寸法や色彩の干渉を考慮しながらコンピュータで展示壁面のシミュレーション図面を作成し、調和のとれた空間を創りだす。第1室に続いて、日本画→工芸→版画→水彩へと部門ごとに各部屋を巡る、ゆるやかな順路が設定される。2階へあがり、最も出品数の多い油彩は、往来自由な順路が設定され、シミュレーションの効果によって大きさ、色彩ともバランスよく、見やすく観覧できるように配慮されている。そうした展覧会として道展会場を歩きながら、眼にとまった作品の印象を綴っていきたい。



今回最も話題となったのは、なんといっても船井勇佑の初出品、初入選での協会賞受賞だろう。水彩部門で歴代初めての協会賞受賞である。19歳という若さに加え、昨年の道展U21で高校生として水彩画作品《Salmon》を出品、大学生となって大賞を獲得した連続の受賞である。昨年のモチーフが鮭であったことに対し、今回は大きく口を開けた鮫であり、「鮭が鮫になって帰ってきた」と、会員らの間で大いに沸いたという。20歳直前、10代の集大成として、これまで描いてきたモチーフをちりばめ、1年以上かけて制作した。水溶性絵の具という意味での水彩で、墨、ペンキも用いた緻密な画面で150号の和紙に描いている。鮫の凶暴さは、10代の象徴だという。



その船井作品の隣に、協会賞を競ったという、本多玲亜の油彩《感懐》が架けられている。昨年から設定された部門優秀賞の、油彩部門での受賞作品。教育大学の学生である。電線と電柱が交錯する煩雑な構成は、現代の通信の電波が飛び交うありようを現実的に可視化するところなのか、と思わせる。しかしその電線の佇まいは、なんとも美しい。

2点の上段には、昨年協会賞を受賞し、今回新会友となった河口真由美の《斬新奇抜参周目》。抑制の効いた色調による線と面の構成のなかに、ワニのイメージが溶け込む。前回出品作と繋がって、作風が確立されていく進展が感じられる。

フロア中央の彫刻群を見ていく。95回に新人賞を受賞した藤森佑生の彫刻《変移》が佳作賞。三つの幾何形体の関係性を探る、一貫したテーマの追究が感じられ、真摯な姿勢が伝わってくる。《巡って、》で彫刻の新人賞受賞した西條拓海も、協会賞の船井同様、昨年U21に出品し準大賞を受賞した。しっかりとした観察が感じられ、こちらも実直な制作姿勢が伝わってくる塑像である。

壁面に戻って、油彩会友賞の津田光太郎《冒頭のシーン》は、漫画の擬音の表現を組み込んだ、特撮映画の場面を思わせる、津田作品ではおなじみとなった展開に、不思議な風格が漂う。

油彩の新人賞を受賞した本間ちゆき《ケサランパサラン》は、自身の姿だろうか、現代画学生の日常のひとつコマを、まさしく「ケサランパサラン」をつかむように丁寧に、慎重に描いている。

隣室に移ると、日本画の部門優秀賞、上田とも子《霧の中の未来》の、ひときわ空間の広がりを感じさせる画面が眼を引く。これまで現在の札幌の街景を繊細ながらも軽やかに描き、清々しい空気を感じられる制作が続けてきたが、眼前全面に金網をめぐるせたのは初めてだろうか。それでも閉塞感なく、「こちら」に立つ人の眼が意識され、空間に重層性を持たせている。



工芸の部屋にはいると、部門優秀賞受賞、兼好陽子の陶芸作品《響奏》に眼が止まる。出品歴は長いと聞いたが、相応に安定した技術を感じさせる落ち着いた品格を感じる。新人賞は、高土居莉乃《灯の器》。会員阿部吉伸が教育大学の師であるということで、やはり作風に師弟関係を思わせるが、実生活で直ちに活用できそうな照明器具として近しく感じ、印象的だった。

ところで《蒼風奏月》の渡辺和弘は、螺鈿など用いた漆芸の安定した技術を持つ会員だが、教育大学で伊藤隆



一に習った、おそらく最後の生徒だという。そうした話を聞き、師弟関係に思いをめぐらせながら、あらためて部屋を見回すと、工芸部門の金工作家が、一時期に比べ圧倒的に少なくなっていることに気がつく。教師に従って出品していた生徒が、教師の退会とともに退会するなどの例は、各部門にも見られるというし、また近年受賞した作家が、それを機に退会してしまうことも少なくないという話も聞いた。公募展を作家キャリアの足がかりとして活用するという、ある種積極的な活動の姿勢は、作家自身による人生設計であり、自身で制作発表の場をつかんでいくことも作家の仕事である。そうした公募展の宿命ともいえるような状況をここで嘆いても仕方がないことなのだが。道展をはじめとする公募展会場での、気持ちがあたたまる光景のひとつに、教師や指導者が生徒らに、誇らしげに説明する様子があると思っている。次の世代が育まれていく貴重な場面が、続いていくことを願うばかりである。

もうひとつ奥の部屋に移って、版画部門を見る。会友賞の佐々木裕二《8月の夜》が、モノトーンの抽象、新会員勾坂敏郎の《ある情念（風樹）》と、新人賞の越智沙織《光の海》、内藤直子《いにしえのモスク》は、具象イメージを元に展開した抽象作品であり、部門全体に抽象表現が多い。会員に聞いた、例えば銅版でひとつ技術を覚えると、その効果がどんどん面白くなり、画面は抽象性を増していくという説明に、なんとなく納得させられた。

水彩部門の新人賞、岡田知之《世界は優しい羊のもとでできている》は、遊ぶ子らや人々の群像に囲まれ、街を背負った羊の大きな存在。ファンタジックで優しい世界観が生み出す物語に想像が膨らむ。水彩部門はベテランも多いイメージだが、会員によると、使いやすい画材であるせいか、実は最も手がける人口が多く、その分いちばん入選が厳しい部門だという。

2階に上がると、油彩の部屋が連なる。新会員となった船岳紘行の《ある男の記憶》は、生々しい色彩で夢幻の情景を描いた船岳ならではの絵画世界。30号のサイズは他出品作に比べると決して大きくはないが、大きさで引けを取らない、吸引力を持った表現である。しかしここでも、必ずしも同じ壁面の作品鑑賞に影響はしないよう、展示計画の配慮の効果を感じられた。

油彩最後の部屋には、新人賞を受賞した油彩の城内つ



ぶら《境界線》が高く架けられている。札幌の中心街と思しきビルの海原を、鯨が大きく旋回していくイメージが描かれていて、爽快感さえ感じられる。協会賞の船井は「人間より動物に愛着を感じる」といったが、ふたりの作品に通じる、大きな海洋生物に自己開放を求めるまなざしは、現代の趨勢のひとつかも知れないと感じた。

このほか、どの部門にも、受賞作以外でも惹かれる作品はとて多くすべてに触れることができないが、あらためて、今回「道展」という展覧会として拝見し、冒頭に述べたとおり、最後まで楽しませる会場構成の魅力があり、また受賞者の作品は、いずれも風格さえ感じられる見応えあるものだった。しかしそのなかで、世代を問わず、道展を舞台とする作家活動の継続性の問題が、各部門それぞれに少し垣間見られたことは、単純に楽しんでばかりもいられないことであった。

私事であるが、5年ほど前、道内各地域の高校美術部の生徒が集まった、大型油彩作品の制作現場に、半年を越える期間、企画担当として立ち会わせてもらったことがある。その後高文連の展示も幾度か拝見するたび、最近の高校生たちを、デジタル世代とひとくくりにしてしまうのは大変な誤解では、と思わせるほどの、手業の描写力に深く感心した。顧問の作家の指導力もあってこそなせる制作だが、無心で画面に向き合う真剣なまなざしと、納得いくまで何度も筆を重ねる姿勢は、先輩諸氏にまったく引けを取らない、作家そのもののそれであったことを覚えている。だからこそ残念に感じたのは、卓抜した感性と力を持つ彼、彼女らが、必ずしもその後美術の道を歩んでは行かない例が多いということ。当時顧問に聞いても、美術部の生徒十数人中、大学で再び美術を専攻するのは数名、就職で関連する業界に行く生徒は稀だとも言った。美術の感覚、センスは様々な業界でも活かされるから、すべての部員が表現者にならなくてもいいのだが、それでもやはり惜しいと感じる。したがって、今回の道展においてU21から本展へと、確実に地歩を固めていく若き芸術家の勇姿が、殊更に頼もしく感じられたのである。

新世代の発掘や育成は、どの業界にも、いつの時代にも共通する課題だが、北海道の「美術業界」を大きく支える道展が、これからの時代の人間を美術の力で豊かに導いてくれるよう、100回の向こう側まで、続いていてほしい、と願うばかりである。



部門優秀賞 上田とも子  
霧の中の未来



新人賞 イトウマミ  
紫陽花



新人賞 末澤 香  
仲間と



部門優秀賞 本多 玲亜  
感懐



佳作賞 田澤 栄二  
小川のある風景



佳作賞 照井まゆみ  
子守唄



佳作賞 橋詰  
博

## 受賞者の ことば

●部門優秀賞 日本画 上田とも子  
この度は、部門優秀賞を頂きました事、誠に嬉しく存じ上げます。近年の、先の見えない不安な気持ちや、それに立ち向かってゆく強い心や希望の様なものが描けたらと、思いました。賞を頂き、本当に身の引き締まる思いです。これからも、精進してまいります。

●新人賞 日本画 イトウマミ  
此の度は新人賞を頂いた事とても嬉しく感じております。7年前に独学で始めた日本画ですが、最近では地元の日本画教室へ通い多くの影響を受けながら、楽しく制作しています。まだまだ欠点の多い作品ばかりですが、日々研鑽を重ねてまいります。

●新人賞 日本画 末澤 香  
新人賞を頂いて、驚き、光栄に思います。追分の小さな友達が、自分の世界を一生懸命見せてくれるのが可愛くて、その姿を描きたくて頑張りました。

●部門優秀賞 油彩 本多 玲亜  
この度は油彩部門優秀賞をいただけてとても光栄です。私は「人間が積み重ねて作り上げてきた景観」をテーマとして絵を描いていますが、今回の作品では時間帯や視点の違う電柱を描いてそれを表現しています。人工物の複雑な線の絡み合い方の美しさや迫力が伝わると良いなと思います。

●佳作賞 油彩 田澤 栄二  
この度は、賞を頂きありがとうございます。千歳へ移動中、渋滞で脇道に入り鳥松、長都の自然豊かな景色に出会いました。草深き小川と地平線、そして高い空、北海道の原風景でした。その時のモチーフが、受賞作となり、この喜びを、励みにこれからも、制作したいと思っています。

●佳作賞 油彩 照井まゆみ  
長い間「母子」をテーマに取り組んでいます。『小さな乳児の大きな命・言い知れぬ母の不安と祈り・少し不穏な空気をまといながらも聞こえる優しい子守唄…』

見えない世界をどう描くか 難しい課題ですが、今回の初受賞で大きな励みと自信になりました。

●佳作賞 油彩 橋詰 博  
楽しんで描いていこうと定年後に再開。その後の3度の出品時にはそれなりに楽しさがあった。ただ今回は度々絵筆が止まる。上手くない焦燥。最後まで煮え切らない気持ちのままだったが、受賞の報で勇気づけられた。「有難い」の言葉を実感している。苦しい過程も含めての楽しさを感じられるよう続けていきたい。

●佳作賞 油彩 松本 裕介  
佳作賞を受賞させていただき、大変うれしく存じます。今作は、北海道教育大学札幌校の卒業研究の一環として制作した作品でありました。中学校の美術教師として多忙な日々を送るなか、受賞の知らせを頂き、



佳作賞 松本 裕介  
重なり合っ



佳作賞 丸山 裕也  
光と闇に塗れて踊る青春



佳作賞 加藤 隆  
グリーンアイランド8



佳作賞 松木 敦子  
762



新人賞  
境界線 城内つぶら



新人賞  
ケサランバサラン 本間ちゆき



協会賞  
最後の足掻き 勇佑

大きな励みとなっております。今後  
も精進してまいります。

●佳作賞 油彩 丸山 裕也

今回の絵は、クラブ内の暗闇、レー  
ザーライト、そこで踊ったり楽しんで  
いる若い男女達等、それら全てが  
融合・一体化した空間を描きました。  
これからも自分の表現の追求を  
していきます。

●佳作賞 油彩 加藤 隆

今回佳作賞をいただき大変ありが  
とうございました。日々つたなく手  
探りの中の制作ではありますが、受  
賞を励みにこれからも自身のテーマ  
に自問自答し必要なかたちやこと・  
ものを追求する姿勢を持ち続けて  
キャンバスに向かっていきたいと思  
います。

●佳作賞 油彩 松木 敦子

わたしが生まれ育った所にはあま  
り自然が残っていませんでした。そ  
のせいかわたしは森林が大好きで  
す。北海道に移住してからは自然に  
ふれる機会が増えました。今回は森  
林の中に置き去りになったレールを  
描いてみました。森林の静けさと、

かつて人間の生活と深い関わりの  
あった錆びたレールとの対比を表現  
しようと苦心しました。

●新人賞 油彩 城内つぶら

この度は私の作品を新人賞に選出  
して頂き、誠にありがとうございます。  
100号は今まで描いたことのない  
大きさで、壁にぶつかることもあり  
ましたが、納得いく作品を追求で  
きたと思います。これからも先生方  
のご指導のもと、より自分らしい表  
現を目指して、制作に取り組んでい  
きたいです。

●協会賞 水彩 船井 勇佑

此度は、北海道美術協会賞を授賞  
下さいました事に心より感謝申し上  
げます。この作品は、純粋な10代最  
後の叫びをテーマにしている、これ  
までの人生の集大成として、10代の  
爆発力、凶暴性を鯨で表現しまし  
た。今回の授賞を励みにして、今後  
も精進したいと思ます。

●佳作賞 水彩 村本 洋

工芸「陶」から絵画「水彩」に替  
わってから今回思いもよらない評価  
をいただき、本当にうれしく思っ

おります。毎年何を描こうか?と思  
案し悩み、時間を要しますが、「自  
分のテーマらしきものを一つ持つべ  
き」と先達のアドバイス、自分なり  
の個性表現等々、空回りするばかり、  
「相剋は美なり」と云った美術家が  
いたが、テーマの入り口になるか?  
と考えています。

●佳作賞 水彩 久野 省司

榛の木立の中に、人知れず咲き誇  
る水芭蕉の花に魅了されて早十年が  
経とうとしております。気がつくと、  
湿原の春を描くことが私のライフ  
ワークとなっていました。この度の  
受賞を機に、これからも益々精進し  
て参りたいと思っております。

●佳作賞 水彩 太田 行子

朝早く目がさめ寝付けなくなった  
のでそのまま、描きはじめている作  
品の前に座った。しばらくすると朝  
日が窓から差し込み、並べたモチー  
フに当たって今まで見たことのない  
強い影を作った。これだ!と毎朝早  
く起きて夢中で描いた。そして佳作  
賞をいただき喜びでいっぱいです。  
これからも空気を感じる作品を描い  
ていきたいと思ます。



佳作賞 村本 洋  
農道風景



佳作賞 久野 省司  
早春 3



新人賞 岡田 知之  
世界は優しい羊のもとでできている



佳作賞 太田 行子  
朝のはじまり



新人賞 横山 邦彦  
都会の夕暮れ



新人賞 越智 沙織  
光の海



新人賞 内藤 直子  
いにしへのモスク

●新人賞 水彩 岡田 知之  
新型コロナの蔓延があり、38年ぶりに絵を描いた。はじめは、小学校で使うクーピーでいたずら程度に描いたのがスタートであるが、絵を描くことが楽しくて好きなことを再認識した。今回の道展へ出品した大きさを描くのは実に40年ぶりである。退職後の再スタートだが、楽しみながら自由に描き、自分の世界を表現してきたい。

●新人賞 水彩 横山 邦彦  
コロナ過になってから始めた水彩画で初めは年に250枚程、独学で描き続けました。友人の薦めで個展も開き生涯の楽しみが出来ました。そんな時に友人から道展の誘いを受け初出品した所、賞まで頂き人生で最高のご褒美です。作品の方向性が見えてきたので努力を続けます。

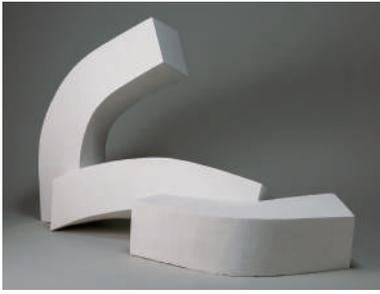
●新人賞 版画 越智 沙織  
このたびは、私の作品が色と線の楽しさを表した【光の海】版画で受

賞することができましたことを、心より嬉しく思います。この受賞は、私にとって大きな励みとなりました。作品が、審査員の皆様に評価され、選ばれたことは、私にとって大きな自信となります。これからも更なる精進を重ね、創作活動に邁進してまいります。

●新人賞 版画 内藤 直子  
銅版画の様々な技法を実験してみるのが好きです。腐蝕によって、偶然に意図しないものができる。「失



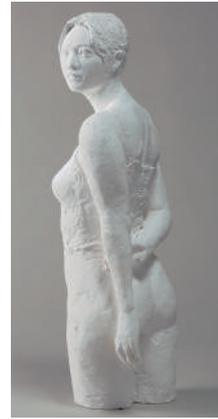
ギャラリーツアーの様子



佳作賞 藤森 佑生  
変移



春風  
新人賞 亦野 翔太



新人賞 西條 拓海  
巡って、



新人賞 高土居莉乃  
灯の器



部門優秀賞 兼好 陽子



佳作賞 石井 雅子  
誉平焼 初冠雪

敗した」と、感じながら、何とか仕立て直して完成させる。そんな過程が楽しいです。これからも、偶然に出会いながら、作品を仕立てていこうと思っています。

●佳作賞 彫刻 藤森 佑生

昨年春に大学を卒業して制作の環境が大きく変わりました。そのような環境のなか道展を目標として制作活動に励んでおります。まだまだ試行錯誤の最中ですが、今回の結果に恥じぬよう今後も精進していきたいと思っています。

●新人賞 彫刻 亦野 翔太

北海道教育大学札幌校にて会友の花輪先生、会員の藤本先生を中心とした先生方にご指導いただき新人賞を受賞させて頂いたことを大変光栄に思います。今年はU21ラストイヤーですので、新人賞の受賞作家としての責任を感じつつ鋭意制作に取り組みたいです。この度はありがとうございました。

●部門優秀賞 工芸 兼好 陽子

生駒道子さんのところで何年も一緒に制作していました。やめられた

のでどうしようかと？地元の陶芸センターに戻って制作していたやさきに指導者がこの夏亡くなり、またも途方にくれました。素焼きを終えた作品がどんと台車に置かれていた。届いた吉報に歓喜！ありがとうございます。

●新人賞 工芸 高土居莉乃

この度、数ある素晴らしい作品の中で新人賞をいただきましたこと、本当に嬉しく思います。「灯の器」は暗いところで見るとまた違った雰囲気を持つ作品です。それぞれの器の丸い形が浮かび上がり、幻を見ているかのような幻想的な雰囲気を楽しんでいきたいです。

●佳作賞 工芸 石井 雅子

陶芸を始めて35年窯を持って18年になり、去年は灯油窯のバーナーの調子が悪く修理に出す等のアクシデントがあり同時に悩みも多い時期となりました。そんな時を経て道展には過去4回入選させて頂きましたが賞を頂いたのは今回が初めてとなります。将に継続は力なりですね。受賞の陰には手間暇掛けた地元の素材を提供してくれる夫がいること事、何時も見守ってくれている先生がいる事に感謝し、此からも滅気ずにより一層作品作りに励みたいと思います。皆様この度はどうも有難う御座いました。

【『第98回道展』の搬入日と会期について】

- 会員・会友搬入日：2024年9月28日(土)
- 公募搬入日：2024年10月10日(木)
- 会期：2024年10月16日(水)～11月3日(日)
- 会場：札幌市民ギャラリー

# 2023道展千歳エリア展

水彩会員 竹津 昇



道展千歳エリア展は、道展に所属していることが誇りに思える瞬間です。

遠くは、旭川、日高、室蘭から作品が集まり、55点そろいました。本展では制約があり出展できない200号や連作、少しジャンルの異なった作品もあり、見応えがあります。

地方の展示では出せない、あか抜けた雰囲気最良です。千歳近郊の市民に道展をアピールする絶好の機会です。



2019年から隔年で実施し、今年で3回目を迎えます。11月15日から19日まで千歳市民ギャラリーで開催しました。千歳市民文化センターの開催事業で道展が協力しているという形です。

千歳市民ギャラリーは10万人の街としては、立派な施設で、道展の作品がなお引き立って見えます。

## 『第97回道展移動展のご案内』

- 第67回釧路移動展：2023年11月21日(火)～26日(日)  
釧路市立美術館（開催は終了致しました。）
- 第75回帯広移動展：2024年1月18日(木)～23日(火)  
帯広市民ギャラリー

## 【2024 第14回道展U21の 搬入日と会期について】

- 搬入：2024年1月30日(火)
- 会期：2024年2月2日(金)～2月4日(日)
- 会場：札幌市民ギャラリー

絵好きの集う店

カフェ **北都館** ギャラリー

札幌市西区琴似1条3丁目1-14 第一病院向  
TEL 011-643-5051

営業時間 水～日 AM 10:00～PM 7:00  
火曜定休日 月 AM 10:00～PM 5:00

メールアドレス [hokutokan@sa3.gyao.ne.jp](mailto:hokutokan@sa3.gyao.ne.jp)  
<http://hokutokan.jimdo.com>



起源が謎とされる枕詞の中でも一般的なものの一つで奈良を修辭する「あをによし」。青丹(土)、青と丹(赤)の両方で解釈可能だが、より古い記紀の歌謡では「奈良山」に、藤原京の成立以降の和歌では「奈良の都」等に掛かるのは、時が移ろい讃える対象が、青色の土壌顔料豊富な奈良山の土から、青や赤で彩られ繁栄した都に変容したためか。

C76% M51% Y75% K12%

そらみつ俊の国あをによし奈良山越えて…

<http://nakanishi-shuppan.co.jp>



NAKANISHI  
PUBLISHING  
CO.,LTD.

since 1988

## 道展ニュース

No. 152 [2023年12月16日発行]

発行 ■ 北海道美術協会  
編集 ■ 道展広報部  
URL ■ <http://www.doten.jp>  
デザイン ■ 笠井真紀子(中西印刷株式会社)  
印刷 ■ 中西印刷株式会社

編集  
後記

今年は、例年通りの時期に、コロナ以前の様な道展が開催されました。「やっと道展が戻ってきた」という思いの97回展でした。

今年も若い力が会場を圧倒し、ベテランの技量が作品の質を際立てた展覧会でした。入場者数も8000人を超え多くの皆様に鑑賞頂け

たことを感謝いたします。100年と云う節目に向けて益々道展を盛り上げていきたいと思ひます。

(R. Y.)